

寸言

道草が生んだ世界

神谷 徹



「今日なすべきことを明日にのばすな」という言葉がある。実は、この言葉を聞くとどうも落ち着かない気分になる。なにしろ、これまでの人生で「今日なすべきでないこと」ばかりをやってきたような気がするからである。

とはいえ、人はなかなか「なすべきこと」をする気になれないものだ。かわりに「なすべきでないこと」ならばいくらでもできる。たとえば、テスト前には勉強する気にならず、関係のない小説を読破してしまったなどという経験が誰にでもあるはずだ。

私はふだん、いろんなところでストローの笛を演奏しているのだが、プロフィールを見た人によく訊かれる。

「宇宙物理が専門だったのにどうしてこうなったんですか？」

たしかに自分でも不思議なのだが、結局のところ、こうなったのは数々の道草や寄り道の結果だろう。つまり「なすべきでないこと」を真剣にやりすぎたせいなのである。

むかし、理学部の学生だった頃に、たまたま聞いたレコードで「リコーダー」の魅力を知った。リコーダーというのは、現在では小学校などで使われている「たて笛」のことだが、実は西洋で古くから使われた楽器で、とくに300年ほど前の「バロック音楽」には欠かせない存在なのであった。バッハやヘンデルといった大作曲家も、この楽器のための作品を数多く残しているのである。

もともとバロック音楽が好きだったし、ちょうど大学紛争が盛んな頃で、授業のない期間が長かったせいもあって、すっかりリコーダーにのめり込んでしまった。楽器店で木管のリコーダーを買い求め、本来やるべき理科系の勉強はあまりせずに、ひたすら笛ばかり吹いていたのである。当時の私にとって、この「なすべきでないこと」には抗しがたい魅力があり、「なすべきでない」ゆえなのか、不思議なほど真剣になれるのであった。

卒業するときにも就職のことはほとんど頭になか

った。リコーダーの演奏家になれるのかどうかはまったく分からなかったが、とにかくやれるところまでやってみようと、今にして思えば、ずいぶん無駄なことを考えたのである。はじめのころはもちろん、ほとんど仕事がなかった。だが、音楽教室や講習会などでリコーダーの指導をしているうちに演奏する機会も少しずつ増え、ふとしたきっかけで音楽大学の非常勤講師になることができた。こうして、徐々に音楽家らしい体裁になってゆくのであった。

とはいえ、まだほんの駆け出しである。日々の練習や音楽様式や分析の勉強などは当然「なすべきこと」であったし、それなりの努力もしていたわけだが、ちょうどその頃、学生たちと一緒にストローの先をつぶして遊んでいたのがきっかけで、ストローの笛の新たな歴史が始まったのだ。

最初は鳴らすだけでも苦心した。いい音は出ないしすぐに疲れる。でも、自分にとってまったく必要のないことだけに、かえって面白かった。そして、毎日やっていると確実に上達するのが嬉しくて、いくらでも深みにはまってゆくのであった。

十年目くらいに、二本以上のストローを同時に吹いて、メロディーとハーモニーを同時に出せる画期的な楽器を作りはじめた。そしてさらに数年後、予想もしなかった面白い発展を遂げる。息の力で動く楽器が次々に登場したのだ。それも、ただ動くだけではなく、楽器ごとに演奏する曲目を決めて、それぞれの曲にふさわしい動きになるようにしたのである。たとえば「ぶんぶんぶん」ではハチが回る。「さくら」では最後に花が開く。「しゃぼん玉」はしゃぼん玉が実際に出てくるといった具合だ。

そして、この動く仕組みを考えるのは「物理」なのであった。もちろん、たいして複雑な物理ではないが、理科的に考えなければ作れないものだし、これはふだんの音楽活動ではほとんど使えない能力であったから、そのことにも新鮮な喜びを感じた。

今のところ、こんな不思議なストロー楽器で演奏活動しているのは世界でも私だけだと思うが、今後さらにどんな道草をして、いったいどうなってゆくのだろう。自分でも予想がつかないことだが、ひそかに楽しみにしているのだ。

(かみや とおる リコーダー、ストロー楽器奏者、昭和48年理学部卒業)